連載　（供覧）いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす

世界平和のための祭祀を復興させる

第二十五回　　伝来仏教の性質と国学

南出喜久治（令和７年９月１日記す）

ちちははと　とほつおやから　すみめおや　やほよろづへの　くにからのみち

（父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道）

だからこそ、仏教に魂を奪はれ夢中になつて、祖先、自然、英霊を尊ぶ祭祀の道を怠つてはならないとの推古天皇のご詔勅が出されたのですが、これまでの歴史において、この御詔勅の存在と意味を殆ど誰も語らなかつたことは不思議でなりません。

我が国では、古代、中世、近代、現代では、精神世界は仏教が支配し、江戸後期における国学や後期水戸学においても、漢心（からごころ）に支配されて、やまとごころによる祭祀の道は説かれず、尊王攘夷といふ「天皇教」といふ宗教が説かれて、祭祀の心が説かれることなく今日に至つてゐます。

国学や後期水戸学は、寄つて立つものが異なります。国学は、古事記、日本書紀であり、漢心を排して大和心を説きましたが、これには祭祀の心がありません。そして、後期水戸学は、儒教の大義名分論により尊王攘夷を唱へましたが、これにも祭祀の心は語られず、天皇教の域を出ませんでした。

「大義親を滅す」といふ言葉が独り歩きし、祭祀否定、祖先軽視の思想家、宗教家、天皇教信者などばかりが歴史を飾り、孝は忠よりも劣後し、忠孝一如、忠孝一本、忠孝双全の真意を理解することなく、祖先よりも神仏が尊いとして、精神論、道徳論を振りかざすので、信仰世界は、敬神崇祖すらままならず、宗教が独占して祭祀の道は遠ざつてしまひました。

祭祀の民と激烈に対立して征服して行つた欧米の歴史と我が国の歴史とは大きく異なります。我が国では、仏教の民が祭祀の民を徹底的に弾圧したといふ歴史はありません。むしろ、その逆で、廃仏運動は近代まで続きました。

仏教伝来時における崇仏論争における崇仏派の蘇我氏に対する廃仏派の中心勢力の物部氏との間で限定的な武力対立はありましたが、物我氏系の一族は多く、全国に分布して祭祀を担つてきたために、崇仏論一色になることは全くなかつたのです。

そのために、外来宗教の仏教を排斥する廃仏論は根強く、支那においても、三武一宗の方南と呼ばれる仏教弾圧、韓半島においても、儒教を国教とする廃仏政策、そして、我が国でも、江戸時代に朱子学の倫理による神仏習合の否定と神仏分離、「出定後語」で大乗非仏説論を説いた富永仲基による論理的批判、水戸藩の廃仏毀釈などが明治期の廃仏毀釈、神仏分離へと続きました。

仏教の側からは、廃神論は起こらず、大乗非仏論説に反論もできず、伝来仏教から鎌倉仏教に至る仏教宗派の立論を正当化することができませんでした。すべての日本の仏教はシャカの説いたものではなく、日蓮が「真言亡国、禅天魔、念仏無間、律国賊」と批判したのも天に唾するもので、どの宗教もシャカの説いた仏教ではなかつたのです。

そして、仏教教団は、専ら神仏習合を惰性的に進めることで廃仏論の攻勢を躱してきたのですが、大衆の意識は、そのやうな論争とは無関係に、「神仏」といふ一体の認識で神仏習合を受け入れてきたのも、民俗信仰としての祭祀の残像が生き続けてきたためなのです。

おそらく、神仏習合の世俗的なイメージとしては、遠い先祖を神、近い先祖を仏、天津神を神（皇祖皇宗）、国津神（祖先神、氏神）を仏としてきた感があります。死んだら仏になり、偉大な仏は神として国津神として祭られるといふ感覚が神仏習合を続けてきたのです。

いはゆる仏教伝来のとき、仏を蕃神（となりのくにのかみ）として、神の一種として祀つたことが神仏習合の始まりです。